

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 13 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520029

研究課題名(和文) 漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史の研究

研究課題名(英文) The Study on the influence action history of the translation and the acceptance of Kantian Philosophy in East Asia cultural sphere

研究代表者

牧野 英二 (MAKINO, EIJI)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70165679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、次のような研究成果を挙げた。第一に、日本、韓国、中国・台湾の漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の現状と課題を解明した。第二に、日本、韓国、中国・台湾におけるカント哲学研究の国際的なネットワークを構築することができた。第三に、日本、韓国、中国・台湾におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史の課題を解明することができた。最後に、本研究の一部は、すでに『東アジアのカント哲学』に発表された。

研究成果の概要(英文)：This study raised the following research results. First, I clarified the current status and issues of the translation and the acceptance of Kantian Philosophy in East Asia cultural sphere, i.e. Japan, Korea, China, and Taiwan. Secondly, I built the international network of the study on Kantian Philosophy in Japan, Korea, China, and Taiwan. Third, I was able to elucidate problems of the influence action history of the translation and the acceptance of Kantian Philosophy in Japan, Korea, China, and Taiwan. Lastly, part of this work has already been presented in "Kantian Philosophy in East Asia".

研究分野：人文学

キーワード：哲学原論・各論 哲学・倫理学 カント哲学 翻訳史 受容史 東アジア 影響作用史

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の当該研究状況

21世紀に至り、漢字文化圏のカント哲学の翻訳及び受容は、日本国内だけでなく、韓国、中国・台湾等の諸国・地域内では、それ独自の進展の成果を挙げるとともに、欧米との独自の研究交流を継続的に行なってきた。

それにもかかわらず、同じ漢字文化圏に属する日本、韓国、中国・台湾のカント哲学の研究状況は、相互に連携と共同研究が殆ど進展していなかった。要するに、漢字文化圏における日本、韓国、中国・台湾のカント哲学に関する翻訳・受容の影響作用史は、未開拓のままに残されてきた。

(2) 研究代表者の研究状況

こうした研究状況の中で、研究代表者は、2009年度から2011年度まで継続した挑戦的萌芽研究の成果の一環として構築した東アジアのカント研究者の人脈を活用した。また、さらにそれを新たに拡大することによって、本研究課題の目的の遂行に必要な連携やインタビュー、現地調査、共同研究の機会を設定することができた。

具体的には、本研究者は、韓国、中国・台湾等の哲学研究者やカント哲学の専門家との国際的な共同研究の機会や相互の連携、資料提供の場を活用することができた。

(3) 漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史研究の展望

中国では、カント哲学研究の盛んな北京大学哲学系及び中国人民大学哲学学院の教授陣との連携を図る必要がある。

また、漢字文化圏におけるカント哲学研究の伝統が継承されてきた香港中文大学哲学系、台湾中央研究院中国文哲研究所や国立台湾大学哲学系の研究者との共同研究や資料の相互提供の機会を得るよう努めることが必要である。

韓国では、旧京城帝国大学であった国立ソウル大学や、蔚山大学、東義大学等の諸大学の韓国カント学会の会長経験者を中心に、韓国のカント哲学研究の現状と課題について、調査することが必要である。

2. 研究の目的

(1) 研究目的の意図

本研究目的の意図は、18世紀ドイツの哲学者であるイマヌエル・カント (Immanuel Kant) 哲学の漢字文化圏における翻訳・受容の影響作用史を研究することによって、従来看過されてきた19世紀以降今日に至るまで、東アジアにカント哲学が翻訳・受容された歴史的・社会的経緯を明らかにすることである。

また、本研究目的の意図は、日本、韓国、中国・台湾にカント哲学が翻訳・受容されることによって、その独自のカント解釈及び翻訳のされ方をした状況及び固有の課題を比較検討することにある。

これらの比較検討によって、日本、韓国、中国・台湾におけるカント哲学及び関連する哲学の研究姿勢の共通性や相違点を解明し、ひいては哲学及び関連諸学問の翻訳・受容の特徴と相互の影響作用史を解明することにある。

(2) 研究目的の狙い

本研究目的の狙いは、これまで類例のない新たな東アジアにおけるカント哲学研究の試みである。それは漢字文化圏、日本、韓国、中国・台湾に伝播した18世紀のドイツの哲学者イマヌエル・カントの哲学思想の翻訳・受容の影響作用史を研究することにあつた。

また本研究目的の狙いは、日本、韓国、中国・台湾におけるカント哲学の翻訳・受容の固有の歴史的・社会的文脈における相違点や共通点、そして人的交流を含めた相互の影響関係を解明することにあつた。

さらに本研究目的の狙いは、上記の諸国、諸地域の独特の知的土壌のなかで、他の哲学や思想、宗教との関連から、カント哲学文献及び主要概念の翻訳・受容のされ方が、どのような相互影響を及ぼしたのかという影響作用史を、カント哲学の主要著作に即して解明することにあつた。

3. 研究の方法

(1) 初年度の研究手法

本研究課題の遂行にあたって、本研究代表者が採用した研究手法は、漢字文化圏で日本以外では初めてカント哲学の中国語版著作全集の翻訳を完成させた(2010年完結)中国人民大学哲学学院・李秋零教授と会談し、資料の調査も実施した。同時に本研究代表者は、中国語版カント著作全集の企画・編集・翻訳の方針等をめぐって李秋零教授及び哲学学院の他の教授とも質疑応答を行なった。その結果、中国における従来の未開拓の研究上の発見や課題を共有することができた。

次に本研究代表者の採用した研究方法として、台湾におけるカント哲学研究の翻訳・受容の影響作用史の研究に着手した。その際、同じ漢字文化圏に属する中国大陸のカント著作全集や刊行済みのカント文献の翻訳の評価についても、詳しく調査した。その結果、台湾のカント研究者による中国語版カント著作全集の評価には、積極的評価と否定的評価の両面があることが判明した。そのために、中国大陸とはまったく異なる方針で、台湾のカント研究者によるカント哲学の主要な一次文献及び二次文献の翻訳・受容の成果が精力的に刊行されている経緯と事実が明らかになった。

これらの研究方法によって、主として台湾中央研究院中国文哲研究所研究員で国立台湾大学招聘教授を兼務する李明輝教授や、国立台湾大学の彭文本教授等による聞き取り調査や質疑応答が大きな研究成果を挙げ

た。本研究代表者の調査によって、台湾では中国語版カント著作全集をモデルにした翻訳が行なわれているのではなく、日本の戦後刊行された理想社版カント全集や岩波版カント全集がドイツ語原典からの翻訳に際して、一つの手がかりにされていた研究の方法的スタイルが明らかになった。

(2) 二年目の研究方法

本研究の研究方法は、韓国におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史の研究が、これまでまったく未開拓であったので、二年目に韓国カント協会の会長経験者の在職する蔚山大学哲学系金珍教授及び東義大学哲学系柳志漢教授とのインタビューや討論によって、韓国におけるカント哲学研究の現状と課題を共有することができた。その際に、両教授から提供されたカント文献は、韓国におけるカント哲学の研究に大いに有益であった。

中国では、第一線のカント研究者として活躍している北京大学哲学系の韓水法教授との共同討議の場を設定することができた。この相互討議という研究方法によって、本研究代表者は、中国の最新のカント研究の状況と課題、さらにEU圏、特にドイツのカント研究者と北京大学のカント研究者との定期的な研究交流や刊行物等の情報及び資料の提供の便宜を受けた。また、台湾では、中央研究院中国文哲研究所の李明輝研究員との共同研究を実施し、同時に台湾の最新のカント哲学研究に関する有益な資料提供を受けた。

(3) 最終年度の研究手法

本研究代表者は、本研究の集約に相応しい最終年度の研究手法として、日本、韓国、中国・台湾の漢字文化圏におけるカント哲学研究の翻訳・受容の歴史を全体的に把握できるように研究・調査し、以下のような方法を自覚的かつ積極的に採用した。

まず、最も長い歴史のあるカント哲学の翻訳・受容の蓄積及び遺産を維持してきた日本の研究成果をベースにして、中国・台湾、そして香港にも調査の対象を拡大して、大きな遺漏のないように研究方法の位置付けを適切な仕方ですべて秩序付けることができた。

その結果、文字通り漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史の研究に不可欠の重要な要素を充実させることができた。それによって漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史研究の国際的な共同研究の下で明確な成果を挙げる条件を整備することができた。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

三年間の研究期間の主な成果として、第一に本研究代表者は、漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史の実態及

び研究課題を予想以上に探究・調査することができた。日本における西洋哲学の学術用語の翻訳やカント哲学の主要概念の翻訳の成果が、中国の留学生・亡命者たちを通じて中国大陸に移植されただけでなく、中国の上海に初めて設置された日本語学校に赴任した日本人学者の教育によって、中国大陸から朝鮮半島にまで影響を及ぼした歴史的な経緯が判明した。

本研究の主な成果には、第二に韓国、中国・台湾で刊行された関連資料を多方面から入手し、それらを調査し分析することによって、カント哲学の翻訳・受容の歴史に関して従来知られていなかった事実や従来の通説とは異なる見解を発見した。中国・チンタオでカントの著作の中国語初訳の事実も突き止めることができた。そして日本、韓国、中国・台湾におけるカント研究者の間で共同討議や共同研究の場を設定することで、それらの事実を共有することができた。

その結果、日本、韓国、中国・台湾のカント研究者の間で、漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の上記の影響作用史の共同研究の成果を書物として刊行しようという合意が形成された。

(2) 得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

上記の具体的な研究成果として、日本、韓国、中国・台湾など、漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史に関する上記三カ国・一地域で、基本的に同一の論文集を寄稿して刊行する企画が決定された。

日本国内では、本研究の最大の成果として、本研究代表者が編者及び全体の三分の二を執筆した『東アジアのカント哲学』(法政大学出版局、2015、3.20.260、3-112,187-260.)を研究期間内に刊行することができた。なお、本研究成果に関連するこの刊行書は、本研究代表者個人と出版元の法政大学出版局との個別出版契約に基づいて刊行されたものであり、本科学研究費は一切支出されていない。この事実は、本研究代表者が謝辞とともに本書のあとがきに明記した。

また国外については、韓国では国立ソウル大学教授の白琮鉉教授による序論付で2014年7月30日にほぼ同一内容の論文集としてすでに刊行済みである。さらに2015年6月には台湾でも李明輝教授の編集によるほぼ同一内容の論文集が中国語で刊行される予定である。韓国版及び中国語版の論文集には、本研究代表者による本研究の主要な成果が収録されており、本研究課題の成果が、日本語、韓国語、中国語にほぼ時を同じくして刊行されることは国際的にも大変大きな成果であり、日本国内外に大きなインパクトを与えつつある。

上記の書物は、国内の書評紙(『週刊読書人』2015.04.17)及び全国紙(『東京新聞』

2015.05.掲載予定)に紹介されるなどマスコミで扱われ、一定の社会的反響を引き起こした。

(3) 今後の展望

本研究は、19世紀以降2013年度までの漢字文化圏におけるカント哲学の翻訳・受容の影響作用史の研究に限定されていた。したがって、それ以降のカント哲学に関する最新の研究動向と新たな研究課題については、今後の課題である。

また本研究は、本研究代表者が中心になって日本と韓国、中国・香港・台湾等とのカント哲学研究に関する情報交換や共同研究の実施に限られてきた。

今後の展望としては、上記及びの制限を克服するために、定期的で組織的な研究組織の構築と安定的な国際的共同研究の場を設定することが求められるであろう。これらが徐々に実現すれば、当該研究領域における漢字文化圏のカント哲学の翻訳・受容の影響作用史研究は、他の哲学・思想領域の研究に大きな刺激を与えるとともに、相互に連携しながら、東アジアの哲学・思想研究に重要な役割を果たすことが可能となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

牧野英二、希望の原理としての最高善、日本カント研究、16号、査読無、2015、pp.23-37

牧野英二、翻訳の意義と学問の進歩・発展、国際シンポジウム発表論文集、第1号、査読無、2014、pp.1-14

牧野英二、東アジアにおける持続可能な相互理解のために、韓国日本近代学会第29回大会発表論文集、第29巻、査読有、2014、pp.36-66

MAKINO, Eiji、Two Functions of Kant's Critique of Reason: The Possibility of Critical Philosophy after Postmodernism. Newsletter of the Institute of Chinese Literature and Philosophy, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, R.O.C. 査読有、Vol.24, No.1, 2014、pp.1-19

牧野英二、中国におけるカント哲学の翻訳史の現状と課題、法政大学文学部紀要、第68号、査読無、2014、pp.1-14

MAKINO, Eiji 他、Berichte ueber die japanische Edition von Kants Gesammelten Schriften, Kant-Studien, 2013、査読有、Vol.104, Hefte 3, pp.386-394

MAKINO, Eiji 他、Kant und die Philosophie in weltbuergerlicher Absicht、Vol.1, 査読有、2013、

pp.321-338

MAKINO, Eiji 他、Geschichte und die gegenwaertige Aufgabe der Kant-Forschung in Japan, Proceedings of Symposium on Kant Studies in China and Korea, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, R.O.C. 査読有、Vol.1, 2013、pp.107-126

[学会発表](計7件)

牧野英二、翻訳の意義と学問の進歩・発展、国際学術シンポジウム、東義大学、韓国、釜山市、2014.12.04.

牧野英二、希望の原理としての最高善、日本カント協会第39回大会、岡山大学、岡山県岡山市、2014.11.22.

牧野英二、日本のカント研究の意義と課題：1946-2013年、特約訪問学人専題演説会、中央研究院中国文哲研究所、台湾、台北市、2014.03.07.

MAKINO, Eiji、For Peace in East Asia. Perpetual Peace of Immanuel Kant and Peace in East Asia of Ahn Jung-Geun、北京大学哲学系招待講演会、中国、北京市、2013.12.13.

牧野英二、カントにおける理性批判の二つの機能、特約訪問学人専題演説会、中央研究院中国文哲研究所、台湾、台北市、2013.05.02.

牧野英二、日本におけるカント研究の歴史と今日的課題、1862-1945年、特約訪問学人専題演説会、中央研究院中国文哲研究所、台湾、台北市、2013.04.30.

牧野英二、中国におけるカント哲学の翻訳史と受容について、中国人民大学哲学院カント研究会議、中国、北京市、2012.07.31.

[図書](計5件)

牧野英二 他、法政大学出版局、東アジアのカント哲学、2015、260

牧野英二、岩波書店、岩波人文書セレクション カントを読む、2014、343

牧野英二 他、弘文堂、縮刷版カント事典、2014、607

牧野英二、法政大学出版局、持続可能性の哲学への道、2013、369

牧野英二 他、世界思想社、カントを学ぶ人のために、2012、411

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 英二(MAKINO, Eiji)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70165679

(2)研究協力者

韓国

白 琮鉉 (PEKU, Jyonhyon)
ソウル大学・哲学科・教授

李 美淑 (LEE, Misuku)
ソウル大学・人文学学院・教授

韓 慈卿 (KAN, Zagyon)
梨花女子大学・人文学部・教授

李 京珪 (LEE, kyokei)
東義大学・人文学部・教授

中国

李 秋零 (LEE, Syurei)
中国人民大学・哲学院・教授

廖 欽彬 (LIAO, Chinping)
広州中山大学・文学部・准教授

張 政遠 (TYOU, Seien)
香港中文大学・文学部・専任講師

台湾

李 明輝 (LEE, Minghuei)
中央研究院・中国文哲研究所・研究員

彭 文本 (KO, Bungpo)
国立台湾大学・文学部・教授

国内

近堂 秀 (KONDOU, Shu)
法政大学・文学部・兼任講師

相原 博 (AIHARA, Hiroshi)
法政大学・文学部・兼任講師